

俳句

大津俳句会

ごくごくと霜柱踏む遠き冬

相原 朋子

紅葉を裾模様とし富士の山

一上日登美

夜すがらの帰らざる猫冬の雨

岩崎由美子

一陣の風さらひたる枯落葉かれおちば

岡崎 浩子

みの虫の何を思ふや風の中

香月のり子

漱石忌学び多かり句の集い

佐賀 久子

しめやかに由布の湯泉の街夕しぐれ

佐澤 俊子

陽光を浴びて咲きたる冬薔薇ふゆそうび

中嶋 清美

俳句

つのはな句会

街は霧もや 神代の光さす元朝

志賀 孝子

停車場のにぎわい初春の肥後訛りはる

田上 公代

新星やしおり一枚新調す

上杉 波

ボンネットに初日と猫の足形と

矢嶋 道子

初もうで地球に平和来るように

梅木トキエ

年玉と子の顔を見るめでたさよ

塚本 洋子

古暦はがせば見える大枯野

柴田しのぶ

鳥渡る昔話の消える村

村田 健二

短歌

大津短歌会・野づかさ

「阿蘇行」の始発電車はすみたる秋の大気をはしりぬけゆく

田中 玲子

澄む空に届けとばかり背伸びして今朝ある
吾の幸い想う

豊岡ミツル

柿の木に群れてざわめく鳥だよ世の嘘ごと
見透かす如し

小平 善行

阿蘇谷の高き吊り橋のみこみて秋の朝靄立
ち昇るみゆ

吉永 恵子

からたちの実を手握れば魂のこどくに温し
垣のからたち

坂本 果子

森のなか透きて流るる湧水を子らは両手に
掬い上げ飲む

鞍 岳志

啄木に晶子の歌に憧れし女学生なりき遠き
日のこと

山本 泰子

木犀のかのいづくゆか流れくる小径を歩む
足取り軽く

高村 貴子

足細くしらさぎひとつ立ちつくす田に張る
水にさざ波もなし

吉田 良子

明日の朝会おうと夫が言う声聞きてひと日
が終わる

本田 咲